



## 道徳科だけで道徳的態度や実践力はすぐには変容しない

本校では道徳科の研究をしています。

すべての教育活動で行われている、道徳教育においては、人としてよりよく生きる上で大切なものは何か、自分はどのように生きるべきかなどについて、時には悩み、葛藤しつつ、考えを深め、自らの生き方を育てていくことが求められています。

一方、道徳科の授業では、特定の価値観を子どもたちに押し付けたり、主体性をもたせずに言われるがままに行動させたりするように指導することは、道徳教育の目指す方向とは正反対と言われており、様々な考え方や感じ方がある中で、またときには互いに正しいと思っていることに対立がある場合を含めて、自立した個人として、また、社会を構成する一員として「よりよく生きるために必要とされるもの(道徳的価値)」に向き合い、いかに生きるべきかを自ら考え続ける姿勢こそが道徳教育の求めるものと言われてしています。

つまり、教員が「こう考えなさい」「こうすることが正しいのだからそうしなさい」とするのではなく、子ども自身に考えさせることが重要で、だから「考える道徳」「議論する道徳」という用語が使われるようになっていきます。

また、中学生にもなれば、「どうすることが望ましいことなのか」ということは、これまでのご家庭における教育や小学校教育で分かりきっていることで、それができないときがあるということを実感し「なぜできないのか」と悩むこと、また、どちらも正しいけどどうしたらいいのか分からないという事象について葛藤することが中学生にとっては重要なのです。

そうすることにより、「よりよく生きるために必要とされるもの(道徳的価値)」を表面的ではなく深く理解することになり、自分の中にある「弱さ」などを含めた自己理解も確かなものになっていくのです。そして、自分の適性や特徴などと一生つきあいながら、いかに生きていくかという考えに至るとともに、人が一生を通じて追求すべき人格形成の根幹も確立されていくのです。ですから、道徳科の授業で、道徳的態度や実践力がすぐに変容するというわけではないのです。

本校ではそのような子どもを育成するための研究をしているわけですが、それでは道徳科の授業でどのような場面を重視しているかについて紹介いたします。

### ●9月16日(木)の3年生の研究授業

資料として『『寄りそう中で』作 藤永 芳純』を扱いました。あらすじは以下のとおりです。

会社を定年退職した加山さんは、散歩が好きで気持ちにゆとりのある生活をしていました。ある日、散歩をしていたところ、佐藤さんの家の新聞受けに新聞がたまっていることに気が付き、声をかけたが返事がなく、玄関が空いていたので中に入ってみると、うつぶせに倒れていた。佐藤さんは孤独死で死後3日たった。

その後、加山さんは市の「訪問ボランティア」の活動を始めることになった。最初は「ご高齢の方の話し相手になるぐらい簡単なことだ」と思っていたが、中井さんの家を訪問してみると「いらぬ世話はしないでくれ」などと、とりつくしまもなく追い返されてしまった。その次に、足が不自由な田中さんの家を訪問すると、掃除や買い物を手伝うことができ、田中さん

にいかにも申し訳なきように礼を言われ、加山さんは「よいことをしているんだなあ」と元気を取り戻した。

その後も、中井さんはぶっきらぼうな返事ばかりで、訪問することがかなわなかったが、ある日、近所の後藤さんに「経済的に余裕のある方は違いますね。私も『ボランティアしてます』って、格好よく胸を張って言えるようになりたいものですな。」と声をかけられ、加山さんの心は重くなった。

ある日、再び、中井さんの家に行き、加山さんのお父さんが脳卒中で倒れた話をしたところ、中井さんが「自分も血圧が高いんだ」ということから話が弾むことになった。そして、中井さんは、「してあげる」と言われても返事をする気にならなかったとこれまでを振り返って話した。その話をきっかけに、加山さんは、田中さんの「いつもお世話になって申し訳ありません」と話す顔を思い出し、「世話をしてあげている」ということで、自分だけがいい気分になっていたのではないかと、田中さんに「世話になってすまない」と、つらい思いをさせていたのは、自分ではなかったかと気づき、田中さんに謝らなければならないと思うようになった。

さて、ボランティアは自己満足のためにすることではない、「してあげている」という親切の押し売りのようにするものでもない、ましてや「感謝されることや」「金品をもらう」ことなどの対価を求めてやるものではないことくらいは、子どもたちは分かっているはずです。ボランティアとは、誰にも「ありがとう」などと言われなくても、ただ相手が気持ちいい思いになってもらうために行うものであり、地域ボランティアであれば、地域の皆さんが少しでも暮らしやすくなってくれればそれでいいと、純粋に公共に奉仕する精神でやるものだということは分かっているはずです。ですから、一般的な授業をしていたら、当たり前のことを発言したり、ワークシートに書いたりするだけで、授業が終わっても、「よりよく生きるために必要とされるもの(道徳的価値)」の深い理解や、自分の「弱さ」などを含めた自己理解にも至らないのです。

しかし、当日の授業は違いました。途中である子どもが手をあげて以下の発言をしました。

「誰かのために何かするって、正直かったらって感じることもあるじゃないですか。例えば、ラジオ体操の手伝いで朝起きるときとか・・・」

この発言がとても重要なのです。

おそらく、その教室にいた多くの子どもたちが、多かれ少なかれそのように感じたことがあるはずです。本来なら、その発言をきっかけとして、

○加山さんの「よいことをして気分がよくなる」っていうのは分かる気がする。  
○お金をもらわずにやっているんだしたら、やっぱり「ありがとう」の一言がほしいと思ってもおかしいことじゃない。

などの発言もほしかったところです。

そこから、子どもたちの多くが「確かにそうだ」「自分もそう感じることはある」など、共感する学習場面を経て、「純粋な奉仕的精神で人に尽くすというのが美しいことだというのは分かるけど、それを実践することはとても困難なことだ」という深い理解につながり、自分自身にある弱い部分(本音)に改めて気付くことができるのです。そして、この学習で考えたことは、今後の社会貢献する場面に直面したときに、自分の弱い部分を認識した上で、それでもよりよく生きるための最善の選択につながっていくのです。

中学校で学習する「よりよく生きるために必要とされるもの(道徳的価値)」は、「思いやり・感謝」「遵法精神・公德心」などのように分類されていて、全部で22の項目があります。いずれの学習においても、中学生にとっては分かりきっている正しいことや望ましいこととは相反する心の中の裏の声があるはずです。先ほどの授業のように、そのような裏の声が出てきて、その後複数の子どもたちが同様に、人には知られたくない自分の弱みを発言することを一度でも経験した学級では、今後も「考える道徳」「議論する道徳」が実現されるはずです。

「いじめ」はいけないことだということは、誰もが分かっています。そして、「そのような場面に遭遇したらどうしますか」と問いかければ、「やめなよと言います」「いじめられている子を守ろうとします」「自分たちで止められないようだったら先生に相談します」と答えるでしょう。どれも正しいことで、是非そうしてもらいたいと思います。

しかし、小学生だったらそこまでいいかもしれませんが、中学生だったら、「悪いことをしていると思うけど、『やめなよ』と言うのは結構勇気がいる」「『やめなよ』と言って、いい子ぶっていると他の子たちに思われるのが心配」「先生に相談したら今度は自分がいじめのターゲットになるかもしれない」などの、正しいことをしなければならないのに、その行動に制御をかけようとするもう一人の自分との葛藤をみんなで共有することがとても重要なのです。そして、「自分たちの学級では、勇気を出して、人権上許されない行為に対しては学級を構成する一員として強い姿勢で臨むことにより、強い生徒会をつくっていかなければならない」にまで至っていくのが中学生の道徳科なのです。さらに、そこまで議論が至った学級の中では、「いじめ」は起こりにくくなるのです。

繰り返しになりますが、本校では道徳科の研究をしています。しかし、この研究はすべての授業改善に通じる研究であるとともに、学習の主体である、すべての学級の成長につながる研究であることをご理解ください。

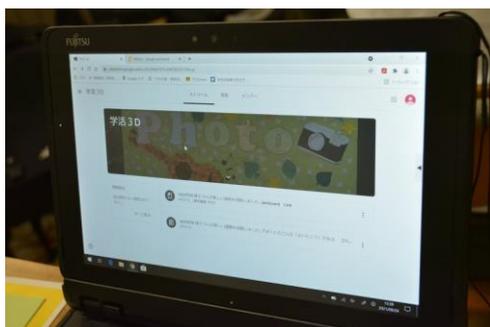
最後に、少し難解な文章ですが、中学校道徳科の学習指導要領にこのような一文があるのでご紹介いたします。

道徳教育を通じて育成される道徳性、とりわけ、内省しつつ物事の本質を考える力や何事にも主体性をもって誠実に向き合う意志や態度、豊かな情操などは、「豊かな心」だけでなく、「確かな学力」や「健やかな体」の基盤ともなり、「生きる力」を育むために極めて重要なものである。

### 学級閉鎖等に備えたオンライン授業のテストの実施

9月15日付並びに9月22日付でお知らせいたしましたように、9月24日(金)に今後の学級閉鎖等に備え、学習計画をできるだけ遅らせないようにするためのオンライン授業のテストを実施しました。

下校前に、情報モラルに関する指導と、具体的な操作や日程の確認をしました。まさに、今日の午後から学級閉鎖になるという緊張感のある雰囲気でした。



下校前:子どもがログインした学活のクラス



下校前:情報モラルに関する学習



学活:全学級 Google classroom で出席確認



学活:電子黒板に投影しながら出席確認

帰宅後は、自分の学級で学級活動を受け出席確認をしてもらい、授業のクラスに移って授業を受け、その後再び自分の学級に戻ってきてアンケートに回答するという流れで、概ね40分程度の学習活動でした。

なお、子どもたちが回答したアンケートの内容は以下のとおりです。

- はじめに学活についてです。On-line 学活に参加できましたか。
- マイク操作(音声を切ったり、入れたりする)はできましたか。
- 画面を通して担任の先生とやり取りできましたか。
- 先生の声は聞き取りやすかったですか。
- On-line 学活での連絡や指示で分かりにくかったことはありますか。それはどんなことですか。
- On-line 学活をしてみて、困ったり分からなかったりしたことがあったら教えてください。
- 次に授業です。配信授業に接続できましたか。
- 先生の声は聞き取りやすかったですか。
- 配信授業中の指示は分かりやすかったですか。
- 配信授業の操作で分からなかったことがあったら教えてください。
- 配信授業に参加してみて、困ったり分からなかったりしたことがあったら教えてください。

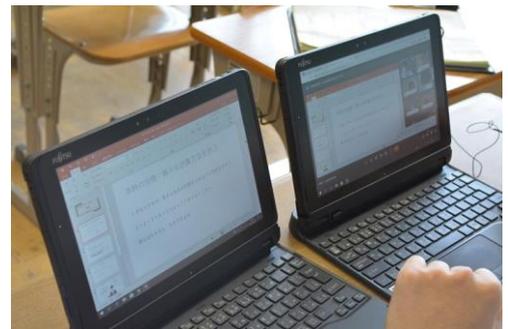
私たち教員は様々なことを検証するため、1クラスの授業だけでなく2クラス合同の授業も行いました。また、授業方法につきましても、Google classroom や Google meet や zoom を活用し、Power Point を使用した授業、ホワイトボードを提示した授業、課題を配布する授業、グループ分けの学習活動を取り入れた授業などを行ってみました。

授業を行いながら、学校側で分かったこととしては、

①Google meet でパワーポイントを使用することはできるが、スライドショーにしても子どもが見る画面は何も変化が起きず最初のスライドで止まったままになること、②zoom でグループ分けして(Google meet ではグループ分けができない)話す活動を取り入れようとしたが、他クラスでWi-fiを使っていると全く動かなくなること、などの問題点がありました。子どもたちのアンケートを見ても、「声が聞き取りにくい」が半分くらいあった授業や「マイク操作ができなかった」がやや多かった学級などがありました。授業者自身で解決できることか、技術的に解決しなければならないことなのか、アンケートの分析をして検討を進めてまいります。

また、子どもたちの多くは、一つの画面を見ながら違うクラスに移動して指示された操作をしながら学習が終了したと思いますが、接続できなかったり、うまく操作ができなかったりして学習に取り組めなかった子どももいると思います。

残念ながら、私たち教員もICT機器のプロではありません。一生懸命、様々な工夫や試行をしてみました。それらも手探り状態です。今回のテストで経験した問題点を解決できるよう努力してまいります。ご家庭の知識や技術でお子様の質問への回答や疑問や問題点の解決ができるようでしたらご助言いただくと助かります。



授業:教員機と子ども機を並べて行う数学



授業:縫い方をホワイトボードで説明する家庭



授業:電子黒板に投影しながら行う理科

## お知らせ

- 新人シード権大会女子バレーボールの部で以下の成績を収めました。

第4位

- 荒川区秋季新人大会ソフトテニスの部で以下の成績を収めました。

男子団体戦 第3位 三國 敬吾(2年)・古橋 ファリス(2年)・河田 颯弥(2年)・  
木谷 剛尚(2年)・須藤 帆道(2年)・河村 優太(2年) <名簿順>